

圏央道が導く 常総市の未来の農業



圏央道常総インターチェンジ周辺計画にあわせた市の農業政策



圏央道常総インターチェンジ

議員
インターチェンジ周辺開発の基本コンセプトは農を生かした周辺開発であり、開発を起点として常総市の農業を復活、再興させるという意味である。常総市の地域資源は、まさに農地であり、農地を生かさなかつたら市の発展はあり得ない。そのため開発企業が農業に参入するという話をしたのだから、どうそれに応え、どういうふうにして市全体の農業の再生を図っていくのかしっかりと考えなければいけない。次世代の農業のあり方、

若い人たちの就農について、市ではどうしていくのか。

産業労働部長

市全体の農業を発展させるための方向性を検討するため、農業者、農業団体、国、県や事業協力者などで構成する（仮称）常総市次世代農業研究会を発足させ、今後の市の農業の在り方について検討していきたい。

議員

農業政策は常総市の今後について重要な位置づけになってくる。人口増、商工業の発展がそれほど望めない中で、常総市が今後生き残るためには自主財源を持つことである。地方交付税に頼っている間はいつまでたつても自立はできない。そのためには、地域に産業を興し、国に対する依存度の低い独立した自治体を考えなければならぬ。常総市を取り巻く農業を活性化させ、若い人たちに収益が上がる農業を教え、支援していくことにより常総市の未来は明るくなるかと考えるが、市長はどう考えるか。

市長

生産者、議会、専門家を交え、しっかりとした5年後、10年後の常総市の農業のあり方、人材育成、農業育成をしていきたい。

日 曜 日 JOSOSHIGIKAYORI JOSOSHIGIKAYORI JOSOSHIGIKAYORI JOSOSHIGIKAYORI 日 曜 日



児童、保護者の観点から学校づくりを

小学校の統廃合について

議員

内守谷小学校の沿革を紹介すると、明治9年5月に北相馬郡内守谷村で発足している。坂手小学校と合併したが、明治22年に独立して内守谷小学校と改称し、同40年に義務教育6年となる。昭和27年には内守谷教育委員会が設立されている。昭和33年1月11日に起工式が行われ、4月1日坂手と内守谷小学校を統合して絹西小学校が設立され、坂手教場6年と内守谷教場4、6年が新校舎に移転した。木造ではあるが、絹西小学校には歴史がある。学校の統廃合に対する教育委員会の考え方は。

教育長

公立小学校は地域の学校と認識しており、地域からの要望を第1に考えたい。小規模化が進むような時には適正配置を改めて考え直さなければならぬと考えている。

議員

統合に対して、学校・児童の立場から考えたことがあるか。

学校教育課長

小規模校、大規模校それぞれの良さを生かした、地域に根差した特色ある学校づくりを行うことが大切と考える。

議員

児童が少ない学校の保護者の考え方を聞いたことがあるか。

教育部長

調査等を行って集約したことはない。適正配置を検討する時期が来たら調査等を行い、地域の声を生かして慎重に検討していきたい。

議員

市長の考えは。

市長

保護者、地域の意見を踏まえ、将来的な観点に立つてもう一度皆さんと一緒に検討していきたいと考えている。



絹西小学校